
SEPTEMBER WARS

ダイちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEPTEMBER WARS

【Nコード】

N7799K

【作者名】

ダイちゃん

【あらすじ】

あの夏の小旅行から一カ月。

忘れがたい出会いと別れを経験し、新しい自分へとホンの少しだけ変わろうと決意した健二。

穏やかでいて賑やかな。そんな日常をおくる健二の前に理一が現れた。

そうして始まった……小磯健二の二度目の……戦争が。

現実と仮想現実。その二つの世界の命運を賭けた戦いが、静かに幕を開けたのだった。

前編（前書き）

本作は【角川文庫板サマーウォーズ】をベースに書かれています。映画版とは若干の違いがありますので、予め相違点を記載します。

OZの管理パスワードを解いたのは？

健二（映画では5人居て健二は不正解）

夏希の設定？

親戚以外の男性には触れず、友人になった男子には必ず告白される為に疎遠になる。例外は健二。長野行きに関しては健二以外を誘う積り無し。佐久間が居たのは夏希にとってもイレギュラー（映画ではその辺の描写は無し）

健二の夏希への想い？

あらわしの落下コースを変更する為に計算をしている最中、佐久間に健二の想いを暴露される。そこまで夏希は健二の気持ちに気が付かなかった。（映画では葬式の中、大好きです！と言っていた）

ラストのシーン？

葬式最中にパスワードを解いた事情説明の為に警察に出頭。理一に送って貰う事に。出掛けに「帰って来たら話したい事がある」と言っただけを出た。途中、理一に「人の役に立つ仕事に興味は無いか？例えばサイバーテロ対策とか」と意味深な言葉を言われる。キスは無い（映画は頬にキスされ鼻血をだして倒れた）

他には、夏希の恋愛思考は大正時代並。妾の子として冷遇されていた侘助に「お前だけでも家族として接してあげて欲しい」と榮に言われ必要以上に侘助に懐いていた。などがあります。

細かい点は上げればキリがありませんが、大まかな所はそんなモノ
だと思えます。

上記をふまえた上で、私の駄文に付き合っただけだと幸いです。

前編

「あ、あの！」

「は、はい！」

陣内家の庭に立ち、向かい合う二人の男女は真っ赤な顔で互いを見詰めていた。

健二と夏希の二人である。

ラブマシーン事件の事情説明の為、理一に長野県警へ送ってもらい出頭した健二。世界中が大混乱をきたし、原発への衛星落下未遂事件まで起きた。その事件のまさに切欠とも言えた健二の行動。

既に開発者として侘助は名乗り出ており、実行犯としてはアメリカ国防総省の関与が指摘されている。この状況で一県警への高校生の出頭がどれ程の意味を持つのかは甚だ疑問である。だがやはりケジメは付けなければとの今回の出頭だった。

そこで健二を待っていたのは二つの意外な対応。

こんなトコに言われても困る。と切り捨てられるかと思いきや、健二の出頭に一時県警内は騒然となった。

今事件において最初に手配された人物でもあり、最後の最後までラブマシーンが使っていた姿は間違いなくケンジのアバターだったのだから無理も無い。

その騒ぎに健二が驚いていたら更に事態は急変した。数人の制服姿と一緒に理一がやって来たかと思えば、健二はそのまま釈放。と言うか無罪放免を申し渡されて解放されたのだった。

帰りのバイクの上で

「一体どうなってるんですか？　なんか訳がわかんないんですけど」
健二の疑問も尤もだったが

「ははは。いや、さっき言ったろ？　君が協力してくれるんだつたら悪い様にはしないって。ま、コレもその一環だと思ってくれ」

「はあ」

そう言われて思いだした。県警までの道のりで

「人の役に立つ仕事をしてみないか？　例えばサイバーテロ対策とか……」なんて話をされたのを思い出した。

はつきり言ってお断りだったのだが、「男は少しくらい謎めいていた方が女にモテる。きつと夏希も」なんて言葉で思わず詳しく聞かせてくれ！　と言ってしまった。

聞けば別に危険な仕事では無いし、今回の様な大規模な事件ではなく簡単な事件の際にでも暗号解読なんかで手を貸してくれるだけで良い。なんて事だった。

無論、今回の一件で陣内の人間に親しみを持っている健二だ。理一が頼めば大した理由が無い限り断る事は無いし、自分が誰かの役に立てるなら断る理由も無い。

「そんな事でしたらお安い御用ですよ」

「そうか、それは良かった。ま、コッチに協力してくれる以上、悪い様にはしないから安心してくれ」

「はあ？」

そんなやりとりを思い出したのはのだが、やはり一つ確認したい事が出来た。

「ところで、理一さんってホントに何処の所属なんですか？」

コレに尽きた。

「その内に、な」

やはりチョット言えない様だ。だがそんな事もあり、昼前に出発した健二と理一が陣内家に戻って来たのは夕方前の事だった。

葬式とは思えない賑やかな陣内家で手荒い歓迎を受け、オマケにドン！ と放り出された先には夏希が居た。

流石にこの大勢の観客を前に想いを吐き出す勇氣は健二には無かったが、まあ、夏希の手を引いてその場を離れる度胸位は持ち合わせていたらしい。

そして今、ココに二人きりと言う訳である。

「あの……い、イイ天気ですね」

「……うん。ありがとう」

「……」

間違った。明らかに自分は言葉を間違ったと二人はより硬くなる。

「あの……は早かったね」

「あ！「こちらこそ！」

「……」

もうこれ以上無いくらい意味が通じない。一体どれ程の混乱状態なのだろう。

だが健二は、ふ、と冷静になった。視線の先では真っ赤になって立ち尽くす夏希の姿。親戚以外の男には触れもしなかった夏希が、自分とこうして向き合う事は彼女にとってどれ程革新的な事なのだろうかと思う。

きっと一杯の勇氣を既に必要としているのかも知れない。ならば自分はどうすれば良いのだろうか？

健二の脳裏にココで過ごした三日間が蘇る。

「……………」

思い出す引き出しを間違えた。

だ~~~~~！ x 陣内家。

「が！ みみみ皆さん！」

突然物陰からあふれ出した一同に健二が驚いたのは無理も無いが、それよりも驚いたのは陰から覗いていた（当人達曰く見守っていた）連中だ。

好きとか交際とかを諸々すっ飛ばしての婿入り要請とは予想外も甚だしい。

「あんたね！ もうちょつとナンかあんでしょーが！」

「幾らなんでも交際が先でしょうが！」

「俺は絶対許さ」

「お前は黙つとれ！」

「……やるな〜彼氏〜。いや、婿どの〜」

「健二さん。まず落ち着きなつて」

一斉に話すのだから訳がわからない。が、どうにも自分が激しく間違った事だけは理解できた。いっそ頭にあらわしても落として欲しいと願ってしまう程に間違った。

「あああああのコレは違うんです。いや、違わないんですけど、お婿さんではなくてお嫁さんにして下さいって、あれ？ いや、違う。欲しいのはお嫁さんでボクが幸せに、じゃない！ だから、ええと」

先程の決意や根性は既にログアウトしてしまった様だ。立派にテンパッてるヘタレがソコに居た。

そんな健二にやいやいと声を掛ける一同の耳に

「……………うん。ありがとう」

夏希の言葉で固まった皆が動き出すまでに三分二十五秒掛かったらしい。

夏希も立派にテンパッていた様だ。

ようやく意識を現実に戻した理香と直美が「ほらっ!」「と健二を押し、再び向き合う。

「え……と、あの」

「……うん」

「……」

緊張が心地良い。どこかで聞える。

あんななら、大丈夫だよ

二人にそれは聞えたのだろうか。お互いの視線が押されたのが感じられた。

「好きです。夏希先輩」

「私も健二君が好き」

この二人にはコレ位が丁度良い。今はまだ……

「アナタの事が、好きです」

そして誰かに背中を押されたかの様に、弾かれる様に近付き……抱き合い……

「……ん……」

初めてのキスをした。

その夜のドタバタはそれはもう凄まじかった。

昼間の勢いそのままに宴会は続き、栄の遺影を囲んでの宴は明け方まで続いた。栄の古い友人達の中にも宴に加わる者も居る。

「どうせなら笑って送ってやらなきゃな。彼女にはその方が良い」それが皆の認識。

栄は愛され、惜しまれ、されど優しく送られたのだった。

終始、夏希との事を冷やかされた健二は早々にダウンした。飲めない酒を無礼講として飲まされてしまった。未成年に良いのか？と……飲ませていたのが警視總監では説得力を持たせるのが難しい話だ。

おかげで帰りの新幹線では念願の夏希の隣に座つての乗車だったにも関わらず、起きた時には到着駅なのだから悔やまずには居られない。

こうして、小磯健二の四日間は幕を閉じたのだった。

* l o g i n *

……ヴォン……ヴォン……ヴォン……

ソレはOZのとある場所で静かに明滅していた。

やがてそのソフトボール大の光から小さなアバターが無数に放たれて行く。それはまるで大きな目玉。漫画で言う「目玉の親父」の様なアバターが無数にOZの空間に解き放たれていた。目は瞬きを繰り返しながら、まるで何かを探す様に跳び続けていった。

広大な空間の中のある一点で止まった目玉の前にあるのは何かの建物。

フイーーン

やがて目玉が赤く光ると何かが建物の中で起きたらしい。慌しくアバターが行きかう。

やがて幾つかのアバターが姿を消し、それを確認したかの様に目玉も消えた。

とある場所に在った光はただソコにあり、やがて光を消していった。

* log out: *

二学期も始まり、あの陣内家の夏から一カ月が過ぎた。健二と夏希は？ と言つと

「健二！ 今日暇？」

元気にPC部改めオタク部改め物理部のドアを開けて放つ夏希の第一声がソレである。

「へ？ 夏希さん？ まあ……暇ですけど」

「よし！ ラッキー！」

「？」

どうやらラブラブの様である。ああ忌々しい。

男女関係に疎い夏希は雑誌の情報に左右される傾向が若干強く、「恋人同士って名前呼び合っじゃない？ だからあ。私は健二って呼ぶから私の事は夏希って呼んでね」と言つて来たのは二学期も早々にだった。

ある程度仲良くなった男子は必ず告白して来てしまい、ソレを断らざるを得ない為に男友達が居ない。

その現状分析を下せる夏希のだが、何故に皆が自分に告白してくるのかの理由に関しては「男の子ってそういうモノなんじゃないの?」と現状に理解が及んでいない。

自分が男子生徒に一番人気の存在である事も知らないし、自分のファンが存在するなども思っていない。だからこそその発言でもあるのだが、ソレを知る健二にとってはただ事では済まされない。

あの難攻不落の篠原夏希が誰かと付き合う事に成ったと知れば大騒ぎは必至であり、それが数学以外たいした取り得の無い草食系男子選手権東洋チャンピオン（暫定）の自分であれば必死は確定。この場合の必死は【必ず死ぬ】に成るだろう。

「あああの！ それは流石に不味い」

「なんで？ もしかして……私とそういう関係だって知られるのって、恥ずかしい?」

かなりしょんぼりしてしまう。どうせ世間知らずの我が俣娘の恋愛感覚大正時代ですよ。な空気が……

「そそそそんな訳無いじゃないですか」

「……じゃなんで?」

「だから……」

健二も必死だ。まさに命に関わる。

「ほら！ やっぱ学校では先輩後輩なんですから、流石に上級生を呼び捨ては不味いじゃないですか」

「そうかな?」

「そうですね!」

「むっ……だって……」

どうやら夏希のクラスに夏休みの間に恋人が出来たクラスメイトが居るらしい。その二人が名前呼び合っているのが彼女は羨ましい様だ。

今まで親戚以外の男には触れなかった夏希に、今は健二と云う恋

人が出来た。彼女にしてみれば、色々と思う事もあるらしい。簡単に言ってしまうえば「私もアレやってみたい!」と言ったところだろう。

彼女の気持ちは分かるのだが、それを叶えてしまえば、この学び舎は健二にとつての戦場となるに違いない。必死の妥協案を練り出す。

「じゃ、じゃあボクは夏希さんって呼びます。ね？ ソレで良いんじゃないですか？」

「え〜……」

「ほら！ 先輩を取って呼ぶのは夏希さんだけだし、ちょっと特別だと思っんですけど」

「うん」

「ね？ ね！」

もう必死だ。

「うん！ じゃあそれでいいや」

「（ほっ）そうですね。うんうん。いや、良かった」

「でも私は健二ね」

「良かった良か……へ？」

ちつとも良くない。

「私は上級生だし普通だもんね！」

「それは」

「よし！ これで決まり！」

そんなくだりを経て今に至るのだが、健二は自らの望みに反しなるとか校内では夏希に出会わない様に細心の注意を払っていた。しかもソレを夏希に悟らせない様にだ。中々に骨が折れた。

万が一にも廊下でばったり会い「あ！ 健二！」などと夏希に声を掛けられようモノなら、もれなく「ああ？ 健二い？」と男子生徒諸氏に殺気を向けられるのは間違い無い。

唯一、健二が夏希に会えるのはこの部室だけだ。夏希がココに入り込んでいるのは周知の事だし、ココには自分以外には佐久間しかない。彼はこちらの事情は理解している。佐久間に見ればわざわざ自分の前限定でイチャイチャされるのは堪ったものでは無いのだが、まあ止むを得ないと半ば諦めていた。

「じゃあ、今夜健二の家行くから」

「いいですけど。あつ！でも夕飯とか」

「ああ、私作るからいいよ。健二の家、今日も居ないんでしょ？お母さん」

「はい。今日から三日間出張だつて言っていましたから」

「じゃそういう事で！六時には行くから。じゃね。佐久間君もまた明日ね」

「はい」

台風が去っていった。だが

「なあ健二」

「……なに？」

「俺……席外そうか？今度から」

「……ゴメン」

最後の一言が無ければ、まるで自分が居ないかのような流だった。

出来るだけ内密に。と言う健二に手は貸すが

「ま、どうせ遅かれ早かれだと思っただけだ」とは佐久間の談。

「いつまでも秘密にしておく訳にもいかないだろ？先輩も可哀相じゃん」

「それは……まあそうなんだけど」

いまだ難問を抱える日々だった。

OZでのバイトを終わらせ帰宅の途に付いた健二。どうやら剣道部は一足先に終わったようだ。急いで返らないと夏希が家に来てし

まづ。と走り出した健二の前に

「やあ健二君。久しぶり」

「！ 理一さん？」

黒い車から降りた理一がソコには居た。

「ちょっと付き合つて欲しいんだ。時間良いかい」

理一の頼みであればやぶさかでは無いのだが、今は帰宅を急いでいる最中。

「すみません！ 今はちよつと急いでまして。また今度にし」

「悪いね。じゃ、出来るだけ早く済ますから」

「え？」

あれ？ と言つ間に車に押し込まれて走り出してしまった。まさに拉致である。

「ちよ！ 理一さん！ コレって」

「すまない、時間が無いんだ。申し訳ないが今は俺に付き合つてくれ」

「ちよ！ ボクこれから夏希さんと約束が」

「すまんがソレはキャンセルしてくれ」

「えー！ー！！」

気が付けば車内には理一だけではない。スーツ姿の人間が三人。運転席、助手席、そして自分を理一と挟む様に一人。

「コレってなんの真似ですか？」

理一が居る事で少しだけ落ち着けた。出なければ泣き叫んで居ただろう。

「あの時言つたらう？」

「え？」

「人の役に立つ仕事さ」

ニヤリと笑う理一に、確かにそんなやり取りも有った事を思い出
す。でも

「まさかまた危険な事に」

「今度は大丈夫だよ。それに我々が付いてる。君の悪い様にはさせ
ない」

「……事情は説明してもらえんですよね」

有耶無耶のままに暗号を解いたが為に前回の騒ぎがあった。もう
ゴメンだと決意していた。

「もちろんだ。説明を聞いて、それでも協力を拒むようなら無理強
いはしない。ただ、すまないが話だけでも聞いてくれないか」

「……………」

健二は無言で携帯を取り出した。

「健二君？」

「夏希さんに連絡します。どうやら夜までには帰れない……………ですよ
ね？」

「悪いね。埋め合わせはするから」

「はあ……………」

夏希にはなにも知らされずにバイトをやらされた。まあ説明する
と言っているだけマシか、と自分を納得させる。

「えー！」

「すみません」

健二からの電話にでた夏希は一瞬で固まった。

いきなり「ちょっとどうしても外せない用事が入っちゃいまして、
今夜は家に帰るの遅くなりそうなんです。すみませんが、今夜は」

と断られた。

「えーーーーー！」

「ほんと！ すいません！」

電話に映るアバターも凄まじく低姿勢だ。確かに何の用事かも言っていないのではさして重要だと思われなかったとしても仕方が無い。

第一、健二が自分との約束をナシにする等は今迄一度も無かった。それ程に大事な用件なのだろう。詮索したい気持ちもあつたが、あまり詮索する女とも思われたくない。すこし迷つたが

「わかつた。急用なら仕方ないモンね。じゃあ、また今度ね」

「はい。ホント、すいません。じゃ」

切れた携帯をベツトに放り投げ、今さっきまで読んでた雑誌に視線を戻す。

「あゝあ。せつかく……健二のばか」

つまらなそうに眺める雑誌のページでは『彼とのラブラブ度を向上する為の十か条』のページ。どうやら『彼氏の部屋で二人つきりでまったり過ごす』にマルを付けているところを見ると、ソレが目的だつた様だ。

小磯健二君十七歳。未だ逃した魚に気付かず。

「……」

健二が連れてこられたのはとあるビルの地下施設。理一の職場だった。

「そ。ココが俺の職場。テロ対策特殊機捜隊。まあ簡単に言えば、様々なテロ犯罪に対して警察や自衛隊やその他諸々の組織が協力し

合って作り出された組織だな。俺は自衛隊からの出向ってことさ」「はあ」

健二の混乱した頭では、要するにテロと戦う部署。と云った認識の程度なのだが、まああながち間違いでは無いのでそのままにしておく。

だが肝心の事が分かっていない。つまり

「こんな所でボクが何するんですか？」の一点に尽きた。

「ああ。ソレなんだが……ちょっとコレを見てくれるかい？」

言って映し出されたモニターには日本地図。そしてソコから一つのウインドウが開き、ある事故現場の映像が映った。

「コレは？」

「コレは昨夜。宮城県内の大衆浴場で起きた火災現場だ」

「宮城？」

理一の言葉に理解が及んでいないと、別の人間の声が聞こえる。

「出火元はサウナルーム。室内の温度調節機能が暴走。天井知らずに上昇して出火に至ったわ」

気が付けば数人の人間が健二の周囲で共にモニターを眺めていた。思わずキョロキョロとしていると場面が動く。

「そしてコレは……今から六日前。神戸のエレベーター事故」

「あ、これニュースを見た」

確かに健二はその映像を見た。エレベーターが突如急降下を始め、そのまま最下層に激突したという事故だった。乗っていた者も周囲に居た者も、結構な犠牲者が出たとニュースで言っていた。

「そうだ。そして他にも青森、静岡、愛媛、そして沖縄。あと」

「ちょ！ 待つて下さい！」

どんどんと増える画面に健二が待ったをかける。まさにキリが無い。

「一体コレがなんだって言うんですか？ ただの事故ばかり並べて

も意味がな」

「コレ等の事故、いや、事件は全て同一犯の犯行だと我々は見ているんだ」

「い？ ……いや、事件つて。コレはみんな事故なんじゃ」

「いや。コレは事故じゃない。犯罪なんだよ」

「そんな」

それから健二は説明を聞いた。

全ての事故は皆不可解な機械の誤作動が原因だと。

サウナ。エレベーター。信号機。電力にシャッター。中には放電現象による爆発まで含まれた。

「そんな……でもどうやって」

「OZだ」

「え？」

まさかまた？ とも思うが

「いや、正確にはOZでは無いけどな。OZの回線を通して誰かが侵入し、そして事件を引きこしたんだ。これはもう……明らかにテロだ」

「OZを通して……そうか。OZの回線は何処にでも繋がっているから侵入経路としては」

健二はそれでも疑問を感じたが

「そしてコレを」

次いで理一が見せた画面は世界地図だった。

「まさか」

「その、まさかさ」

言うや世界地図のあちらこちらで先ほどまでと同様の画面が展開する。その数、実に七十八箇所。

「コレ、全部」

「我々は同一犯の犯行と見ている」

「何の一貫性も思想も見られない」

「まさに無差別テロね」

「時間も場所も自由自在。OZに繋がっていない場所なんて何処にも無いし、ホシの手に掛かれれば何でも凶器になる」

「オーストラリアの遊園地じゃジェットコースターが限界加速を飛び越えてぶっ飛んだらしい」

口々に言う者達には犯人に対する憤りがあつた。

健二にも容易に想像が付いた。もしコレが同一犯の犯行だとするならば、既に被害数は異常な数に登るだろう。ラブマシンの騒ぎどころじゃない。

「でも！」

「ん？」

それでも健二にはずっと疑問がある。

「OZを経由したなら必ず足跡が残ります。それにコレだけの犯罪ならOZだって情報の提供は惜しまないでしょう？」

犯人が誰であれ、OZを使う以上必ずデータは残る。ラブマシンでさえOZの自由にはならなかったが存在は認識出来た。コレだけの騒ぎで痕跡が掴めない訳は無い。

「それだ」

ココで理一が健二に向き合った。

「我々がこの犯行を同一犯としたのは、まさにソレさ。この七十八箇所全てに同じ痕跡が残ってた。そしてソレを追跡して判明したのが……こいつさ」

「え？」

言われて映し出されたのは一つのアバターだ。なんの特徴も無い、眼鏡を掛けた犬型人間。

「全ての痕跡がコイツに繋がってる」

「だったらOZにこのアバターに関する情報提供を」

「したさ。無論、我々だけじゃない。世界中の捜査機関がそれこそ一斉にね。無論OZ側も事態は承知してる。情報は直ぐに渡されたんだが……結果がコレだ」

画面が切り替わると、ソコにはビツシリと数字が並んでいた。まるであの夏に健二が格闘を余儀なくされた暗号の様に。

「これ……」

呆然とする健二に

「コレはOZの施したロックじゃない。このアバターの持ち主が内側から掛けたプロテクトらしい。しかもOZとの権限はしっかりと確保したままだ。このアバターが一体誰のモノなのか。ソレさえ分かればいいんだが……OZの技術者達も今解除に躍りになってる。無論、我々の側もね。だが一向に解けない」

理一の言いたい事は健二にも分かった。自分がココに連れてこられた理由も。

「このアバター……コイツが犯人なんですか？」

「全ての現場に共通するのはコイツだけ。しかも自分でプロテクトを掛け身元を探らせない。容疑が一番濃いのは確かだね」

「……………コレを、ボクに」

「専門家に言わせるとコイツはOZのプロテクトにも匹敵する出来栄らしい。世界一安全と言われるOZにだ。だが」

理一が自分を見ているのを感じる。

「そのOZのプロテクトを解いた者だって居る」

「……………」

「どうだい？ 手を、貸しては貰えないかい」

理一の声に彼を振り向く。理一だけじゃない、その場に居る多くの人が自分を見ているのが分かる。

知らない人に囲まれるのは苦手だ。

知らずに首を突っ込んだ夏の時とは違う。今自分は外に居て、既に多くの人命が失われた事件だ。思わず身が引ける。ふ、と脳裏に聞える言葉。

陣内家の人間に半端な男は要らない

引きかけた心が押し留まる。今もこうして彼女に背を押ししてもら
える自分が嬉しくて、情けない。

大変な時だ。だからこそ自分に出来る事をすると教わった。そし
て信じる……自分なら、

「……出来る……ボクには……きつと出来る」

「健二くん？」

問う理一は、自分の心配が杞憂だった事を悟る。そんな表情を見
せた健二がはっきりと言う。

「紙とペンを。ソレとこの画面、ココに映せますか？」

「お安い御用だ」

* l o g i n *

……ヴォン……ヴォン……

仄かに明滅する物体は、ただその暗闇に在った。

やがて沢山の画面が映し出される。

その数、七十八枚。

ただその画面を展開しているだけだった空間に、更なる画面が増
えた。あるアバターを映し出したソレに、光は一層の眩しさを増す。
やがて多くの場面は消え、その空間には光とアバターを映した画
面だけが残された。

その眼鏡を掛けた犬人間のアバターに魅入られるように、光はた
だ明滅していた。

健二が紙に数字を書き殴り、切り取っては書き、切り取っては書き。既に三時間が経とうとしていた。

始めは「幾らなんでも高校生には無理ですよ」と若干呆れていた者達も、健二の様子に今では固唾を呑んで見守っている状態だ。

時に手を休め、目を閉じる。二十分程もそのまま固まっていたかと思うと一気に書き殴る。

健二はただ、数字の海を泳いでいた。

自由な発想。組み立てられる計算式。散り散りの乱数がゆっくりと組みあがり旋律を奏でる感覚。この数字の海は誰をも拒むのだからか？ 否。そうじゃない。彼等はキチンと道を用意している。それは細くて見え難い一本の道。だけど確かにソコに在る道。

数字を蹴散らす必要は無い。整理して、ゆっくりと、少しづつ……あの長野の夜。自分ももっと優しく道を聞いた筈だ。ゆっくりと泳いだ筈だ。

そうして見つけた、一本の……道。そしてその鍵。

「……………出来た……………」

ざわつ。とざわめく周囲を気に止めず、健二は解いた回答をボードに打ち込み、Enterを押す。

ピーー

画面が切り替わりアバターの主の情報映し出された。

「おおおおー」

「やった！」
「凄い！！」

歓声が沸き起こる。と、思わず健二が床に座り込んだ。

「健二くん？」

理一が思わず顔を覗き込むも

「はは……いや、ほっとしたら力が抜けちゃって」

「！……そうか。お疲れさん。助かったよ」

理一の手を借り立ち上がった健二に周囲から労いと拍手が起こる。かなり恥ずかしく、ちよつと誇らしい気分。

「じゃあ健二くん。お家までお送りしますね」

女性職員が一人健二の前に立ち、彼を伴ってその場を後にした。

健二が一瞬振り返り見た時には、既に理一達はアバターの主に関する情報収集や調査に動き出していた。ほんの一瞬だけ健二の目で確認したのは、画面に映った人物の情報。

桑田 春樹 四十四歳。中央情報管理センター開発局局長

そんな一文のプロフィールだけだった。

* l o g i n …… *

……ヴォン……ヴォン……

その光の前に映し出された画面にはある人物のプロフィール。

桑田 春樹。

健二が解き、結果現れたその画面に光はその輝きを増す。まるで待ち焦がれていたかのように、その輝きを増し光を輝かせる。

パアアアアア!

やがて光は辺り一面を多い、ただ光だけが空間を支配したのだった。

* l o g o u t *

前編（後書き）

前編。ココまでになります。

一応、前後編になると思いますが、力不足で中篇も挟むかもしれない
せん。

ココには初めての投降になりますが、よろしくお願いいたします。

byダイちゃん

中編

* l o g i n *

「なあケンジ」

「ん？ なに？」

「お前……夏希先輩に何したの？」

「……………それがあ……………」

OZの管理塔内のあるスペースで、忙しくモニターやボードを捜査する二つのアバター。

板子ヨコメガネのサクマと……タヌキのケンジであった。

二人は現在OZ内で何時ものアルバイト中なのだが、一つの疑問。

何故ケンジがリスからタヌキになったのか？

ソレは健二に言わせれば「何でだよ！」となり、佐久間に言わせれば「はあ？ 当たり前だろ？」となる。納得いかない健二に若干呆れながらも「まあコレでも見れば分かるよ」と言われて覗いた画面。

「……………え？」

まさに健二は絶句した。

ソコにはデカデカと【ラブマシンとの激闘を制した勇者！】や【キングの相棒はリスだった！】等に始まり、拳句に【勝利の女神吉祥ナツキと謎のリス】なんてモノまで有った。

要するに健二のケンジはOZの世界で超が三つは付く有名人になっ
てしまっていたのだった。

ラブマシーンとカズマの戦いの中で終始行動を共にし、ナツキが
世界を背負って戦った時もソコに居た。それだけでも話題に事は欠
かないのだが、更にはラブマシーンに最初にアバターを奪われた人
物である事もばれているし、それはそのままOZの暗号を解いた人
物である事と同義の意味を持つ。

世界を巻き込んだこの大事件の、まさに始まりの人物であり終止
符を打った人物達の内の一人。これで注目を浴びない訳は無いので
ある。

「お前の姿はあの花札勝負に居た全ての人が見ていたんだし、今は
それ以上の人が知ってる。ソレで本アカ取り直しといたから、お前
コレからソレな」

友人としての至極真つ当な救済措置に、ただただ礼を言った健二
だった。

そんな経緯でタヌキとなったケンジだったが、今一つ覇気が無い。
それもその筈。

「なんでなのか分かんないんだよ。やっぱり昨日の事怒ってん
のかな」

今朝から夏希が不機嫌であるらしい。何度かメールをしたのだが、
一向に吉祥ナツキならの返信は現れない。

「そりゃアイキナリ約束破られりゃ誰だって怒るだろ」

「でも電話した時はそんなに怒ってなかったと思うんだけどな」

「は。そんな訳ないじゃん」

「そっかな」

肩を落としながらも仕事はこなす。末端の仕事とは言え、OZの

管理に関わる事なのだから手は抜けない。

「ま！ バイトが終わったらまた電話してみ？ その頃には学校も終わってるだろうからさ」

「うん。そうだね」

気を取り直し、ソレならばと一気に仕事に取り掛かる。そのあまりの豹変振りに

「なんか……ゲンキな奴」

サクマも呆れるのだが「……俺も彼女欲しいな」と、今度はサクマが落ち込んでいたのだった。

* l o g o u t …… *

「今晚電話してもいいですか」と殆んど懇願状態のタヌキを眺めてニヤニヤする夏希。中々にシュールな空気を醸し出していた。

「昨日はすいませんでした」から始まり「いや」。何とか用事が終わりましたよ」とご機嫌伺い。さらには「……いい天気ですね」と意味不明。そして今のメールである。健二の焦りが見て取れるメールの羅列。そしてその全てに夏希は無反応を貫いた。

夏希としても返信したいのは山々なのだが、ソレを必死で押し留める。ココが肝なのだと言を律する。

全ては二人の明るい未来の為に！ だそうだ。

夏希にソレを吹き込んだのは「恋人を更に惹き付ける十の秘儀！」らしい。一度彼女の購読書は検閲の必要が有りそうだ。

とにかく、夏希は現在その秘儀の一つ「偶には冷たくして相手の焦りを誘う」を実践中の様子。

果たしてその効果の程は定かでは無いのだが、ココは一つ、その雑誌編集者に申し渡しておくべきだったのは「何時まで冷たくするのか」の明記であつたらう。

「ふふふ。焦ってる焦ってる……でもコレ、何時までやればいいんだろ？」

篠原夏希十八歳。そろそろ大正時代からコチラ側に来てくれるとありがたい。

一足先にノルマを終わらせた健二は、未だ横でキーボードと格闘している佐久間を横目に見ながら、ふ、と昨日の事を思い出した。
(そういえば……確か……)
そして自分のPCに手を伸ばし、何気に検索を掛けて見る。対象は

桑田 春樹

漠然とした個人名でヒットする内容などはたかが知れている。所詮は同姓同名の有名人でも出てくるかと思いきや

「あ」

まずヒットした人物が、昨日の人物だった。
理一の職場で見たあのアバターの持ち主。

中央情報管理センター開発局局长 桑田 春樹 四十四歳。プロフィールだった。

「コレって……」

健二がその人物のプロフィールを見るとその人物の事がわりと詳

細に記載されていた。

桑田春樹。

元東京大学助教授であり専門はシステム開発。

大学時代に彼の所属していた研究チームが発表した【移植電脳】は当時は革新的技術と言われ一時、業界を賑わせたらしい。

結局その【移植電脳】という物の完成は見なかった様だが、その研究課程で生まれた幾つかの技術は、世界のシステム産業に大いに貢献し、現在のOZを始め多くのシステムにその技術は応用されているらしい。

一部では『現デジタル文明の父』と彼を指す者も居るようだ。

「ふうん……でもなんでこんな人が」

健二にはこの人物が今回の無差別テロの犯人像とはどこか一致しない気がした。

別にこの男が善人顔と言う訳ではない。ただ人生に満足してそうな気がするのだ。研究成果を買われて数多の企業や機関を渡り、現在では国家中枢にも関与出来る地位にまで登りつめている。四十も半ばの彼にしてみれば人生は上々。人生山ばかりと見受けられる。そんな彼が今回の様なハイリスク・ノーリターンなテロ行為を働くとはどうしても考え難い。

「なに見てんだ？」

「つと！ 佐久間」

何時の間にか彼のノルマも終わったのだろう。健二のPCの画面を覗き込んだ。

「いや、ちよつとね」

「ふうん。何でまた桑田さんのウィキなんか見てんの？ 数学やめてコッチ目指すの？」

「へ？」

なんとも意外だね。ってな雰囲気でジュースを飲む佐久間に、もっと意外性を感じる健二。

「って！ なんで佐久間この人の事知ってるの？」

健二にとっては意外だったが

「あん？ そりゃあ俺ってソツチ方面じゃん。知ってて当然だろ？」

「そりゃ」

確かにプログラムを組む事に掛けては優秀な佐久間だ。知っていて当然だと言われれば納得も出来る。だが、ならばと言う話もある。「ちょ！ ねえ、この桑田って人の事、ちょっと教えて欲しいんだけど」

この人物の掛けたプロテクトを、政府機関の頼みとは言え破ったのだ。事件の容疑者であると言うのも気になる所だし、健二としても情報源が有るのなら聞きたい気持ちも抑えられまい。

だが、そんな健二に返って来たのは、更に意外な佐久間の言葉。

「いや、俺が知ってる事なんてソコに書いてある事位だし、そんなに知りたきゃ聞けば良いじゃん」

「へ？」

だからお前に聞いてるんじゃないか。と言おうとした健二に先んじて、佐久間は画面の一箇所をクリックして一枚の画像をモニターに出した。

「……これ……」

思わず呆然とする健二に

「なんだ？ ホントに知らなかったのか。当時一緒に研究室に居た筈だぜ？ ま、俺に聞くよりはマシじゃね？ 連絡先、聞いてんだろ」

「……うん……うん……」

「？ 健二？ 変な奴」

少し呆れながら「さ〜て。もう帰ろうぜ」と帰り支度を始める佐

久間に生返事をしながら、それでも健二はその画面から目が離せなかった。

ソコには確かに、初老の教授と思しき人物を囲って数人が並んで写っており、若き日の桑田春樹と共に、健二のよく知る人物の若き日の姿があつた。

「侘……助さん？」

今も変わる事の無い、どこか皮肉めいた笑みを浮かべ写る陣内侘助の姿を見つめながら、健二の胸中には嫌なもやが吹き込んできていた。黒い、重い、不吉な何かが。

理一達数人はとある高層マンションの最上階へと赴いていた。その最も広い部屋に居る人物に会う為に。

「随分と無粋な訪問者だな」

「失礼。インターフォンが故障していた様子でしたので、少々強引に入らせて頂きました」

強引どころではない。頑丈なドアをぶち破つての突入だった。

「私は政府要人にも顔が利く。無論、後の事は覚悟しているんだろ
うな？」

「それはご自由に。我々はただ職務を真つ当するだけです」

「ふん！ 寄せ集めの犬が」

春樹の罵倒に一同が身を乗り出すが、理一はソレを留める。冷静

「陣内？ ……はて？ 何処かで……」

「私の事は結構です。で？ 私の問いは聞いていましたか？ なんならもう一度」

「必要無い」

自分の思考を中断し理一を止める。

「では」

「ふん……良いだろう」

春樹は自らの机に腰掛けたまま、肘を付き手を眼前で重ねる。

「確かに私のOZアカウントへは私がプロテクトを掛けた」

「それは把握しています」

「だろうな。まさか破られるとは思いませんでしたよ。なあ君、一体どうやって解いた？」

どこか子供っぽい仕草。エンジニアとしての興味が沸いたのだろうか。

「それが我々の仕事ですので」

「ふん、まあ良い。私は自分の記録を保護し、ココに身を移した。

本当ならOZ上のデータを全て消去したかったが一步遅れたよ。だから私は自分の情報にプロテクトを掛けるほか無かった」

OZとのラインを確保したままデータをロツク。確かに掴んでいた現状と一致する。だが疑問が残る。

「一体何故」

そう、その一点の疑問が。その答えは至極簡単だった。

「私が今回の一連の事件の犯人」

一瞬で、室内の空気が重くなった気がした。一同に思う。自分達は……どこで間違った？

「を、知っているからさ」

桑田春樹のその笑みは、まるで全ての者を嘲笑するかの様だった。

* l o g i n … *

光がある。暗闇でただ明滅する光の前に、一枚のモニター。

光点が幾つかあり、その光点から幾本もの線がアチコチに伸びている。情報と存在を画面で把握し、光はただ明滅を繰り返す。

やがて数多の目玉が光から飛び立ち、光はまたモニターに望む。

やがて……別の一枚が現れる。

何も映し出さない黒い画面。ソコに静かに文字が浮かび上がる。

無機質で、短く。されどどこか意思を感じさせるその文字は、一文をつづつて静かに消える。

ただ一言。

「ミツケタ」と

* l o g o u t … *

「えー！ー！ 雑誌！ー！ー！」

「そ！ だからあ……ごめんね」

可愛らしく舌を出して謝る夏希を前にしては、健二にはもう許すより他に術は無い。ま、始めから許すも何もないのだが。

健二がどんよりと雲を纏って帰宅してみると、自宅の玄関先に夏

希が居た。

もう健二にとってはそれだけで歓喜なのだが、夏希が手にしていたのは大量の買い物袋。

「ほら、昨日ご馳走しそこねちゃったから。今日はリベンジ！ っ
て事で……駄目？」

小首を傾げる夏希が可愛らしくて愛しくて。健二の頭の中では
(駄目？ 確かそんな日本語は無かった筈だ！ どこの国の言語で
すかソレは！)

と脳内辞書の変換請求が出されていたとかいないとか。とにかく、
健二にソレを断る筈も積りも有る訳無く。有る道理も無く。夏希の
手料理をたらふく喰い、彼女の入れてくれたお茶を飲んでの食後の
一時の最中、今日一日の事を夏希に話されたのだった。

「良かった」

一氣に力が抜けた健二。

「？ 健二？」

「ボクはまたてつきり夏希さんに嫌われたかと思って」

「え！」

おかしい。とは夏希。確か【より一層彼氏のハートをがっちり掴
める】筈だったのだが？ と頭を捻る。

「でも……良かったです」

「あ」

思わず見とれる。それ程の良い顔で、健二は笑っていた。

(あ……なんか)

思わず、引かれた。まるで引力に引かれる様に、重力に逆らえな
い様に……健二の笑顔に惹かれ、牽かれ、引かれ……

「え？ 夏希さ！ つうん」

付き合ってから二度目の、キスをした。

「「……………あ」」

唇を離れた後に見えるのは、ただお互いの瞳だけ。

衝動的に動いてしまった。そんな夏希と、訳も分からず事態が動いた健二。

もう互いの頭の中は真っ白になっていた。まあ無理も無い。お互いに異性関係は殆んど経験無しなのだ。だが経験は無くとも知識はある。それなりに普通にある健二と、最近読み漁っている雑誌の情報脳裏に飛び交う夏希。

恋人関係の高校生二人が現在一つの部屋でキスをしました。

場所は？ 彼氏の家でした。

おや？ じゃあ家の人は？ 父は単身赴任で母は出張です。帰るのは明日かと…………

時間はあ？ ……さっき夕食を…………まあゆつくりとした一時を…………

そんな現状の再確認を、脳内のみ もんただか桂三 だかがわざわざ確認してくれた。当然、当人達の脳内議論も絶好調だ。

健二の脳内では

「いや！ 流石にこれ以上は不味いでしょ！」依然として草食動物。

「はあ？ だって向こうからだっただんだけ！ 寧ろ恥をかかせてどうすんだよ！ お前も男だろうが！」ふむ。雄も居る。

「いやいや。これはただの雰囲気であり挨拶だよ。夏希さんに限ってそんなマチガイを助長する訳ない」夏希信者健在。

「喧しい！ この愚か野郎共！ 挿せばセイイんだよ、挿せばっ！…………誰かコイツをつまみ出せ。」

「でも…………初めてだし…………失敗したら」まあ最初は誰でも多かれ少なかれ不安は有るものさ。

「……………いやああああああ！」「……………もう阿鼻叫喚である。

一方の夏希の脳内は？

「いやあ、ついしちゃったね！ このまま進んじゃったらどうしよう？」流石の体育界系。前向きだ。

「駄目よ駄目駄目！ まだ嫁入り前なのにコレ以上先になんて！ 絶対駄目っ！」依然はいからさんが通ってます。

「え〜。でも雑誌によると初エツチの場所はやっぱり彼氏の部屋って多かったし……………ね」何処までも妄信する現代っ子がぶれめ！

「大丈夫！ きつと今のキスで健二もタツてるから丁度イイじゃん！……………栄ばあちゃんを呼んで来い。コイツを引き渡す。

「でもお……………今日の下着……………可愛く無いかも」女の子は色々と準備が……………ね。

「……………いやああああああ！」「……………いや、実にお似合いな二人だ。

そんな混乱状態の二人はただ無言で向き合う。

「いよいよ覚悟を決めようか？ と二人が決意するまで五分間。ついに

「な……………つき……………さん」

「……………なに……………に？」

真っ赤な顔の健二が、同じく真っ赤な顔の夏希の両肩に手を置き、ビクン！ と震える夏希をグッ！ と押さえ いざ！ と言う時

p i p i p i p i p i p i

電話の音が二人の幻想をぶち壊した。

思い切り現実に戻った二人はすぐさま離れ、「わ、私食器洗っちゃうね」とそそくさで行ってしまいう夏希を呆然と見送る健二。逃した魚は百キ口級のマグロだった。

（ぐあああ！　ってか誰だよ！）と半ば八つ当たり状態の健二だったが、電話に映るアバターを見て頭が切り替わる。

ピ！　と直ぐに出る。

「もしもし！」

「！　っと。悪いな、さつきは出れなくて。なんか電話入ってたけど何か用？　彼氏どの」

「すみません、急に電話しちゃって。どうしても侘助さんに聞きたい事があって」

「ん？　なんだ？」

電話の相手は侘助だった。

学校帰りに電話したが留守番電話に切り替わったのでメッセージを残しておいた。連絡が欲しいと。理由はもちろん一つしかない。

「侘助さん。こっちの大学に居た頃に広瀬教授の研究室に居ましたよね？」

それは写真の初老の教授。

「ああ？　まあそうだけど、ソレが何？」

侘助にも意味が分からない。

「その中に桑田春樹って人が居たと思うんですけど」

「ん？　クワタ？　……くわたクワタ桑田……！　おお！　桑田な」

「覚えていますか」

「どうやら侘助の脳裏にヒットしたらしい。まあ有名人の筈なのにその対応が侘助らしいと言えばらしい。」

「居た居た。確か今じゃ偉くなってるんだよね？ アイツ。あんまり日本の話に興味なんか無かったけど、偶にアイツの名前を聞いた覚えもあるな」

「そうです！ その人です。で、その人なんですけど」

「ん？」

「どんな人でしたか？」

「……は？」

健二には彼の姿が見えなかった。

犯人。研究者。権力者。

どれもが当て嵌まらないし、どれもが彼なのかも知れない。だが漠然と感じる違和感を無視出来ない。どうしても、彼と犯人像が結びつかないのだ。その点、侘助からなら経歴や実績じゃない。桑田春樹個人の情報が聞ける筈だ。

「うーん……どくなって言ってもな」

「なんでも良いんです。性格とか嵌っていた事とか」

「いや。なんて言うかな……あまり印象に無い奴だったよ」

「え？」

それは有る意味で意外だった。

「だって、移植電腦って研究で有名になったんですよね？ その研究室に侘助さんも」

「ああ、ソレ違うから」

「へ？」

事も無げに言う。

「広瀬教授の研究は新しい思考ルーティンの開発さ。まあコレは俺のAIにも応用したけどね。あの電腦理論は研究室とは関係無い。ただの独自開発さ」

「そんな……自分で」

「ああ」

侘助の声は少し遠くなる。過ぎた過去に語る様に……

「当時大学でも浮いた存在だった俺がたった一人、友人と呼べる奴だった」

「侘助さんの」

「アレの事は何処まで？」

ふ、と現代の健二に話が振られる。

「いや、詳しくは何も」

「そつか。まあ言ってしまうえばコンピューターに人間の思考や感情を移植しようって話さ」

「人の……感情を？ でもそれなら」

あのラブマシンとはどう違うのだろうか？

「俺の理論は知識の収集、それに伴う進化として判断能力の拡大。その人工知能だ」

「はい」

与えられたアルゴリズムに従い情報を集め、自らの判断材料を増やした。

「だがアイツはソレに否定的だね。情報のみの特化した存在がその課程で習得する判断基準を危惧してた。命はデータでは無いってな……今となっっちゃアイツが正しかった訳だが……だからアイツはソコに人間の価値基準を置こうとした」

「人の？」

「人の精神をデジタル化……思考・判断・価値、そして善悪。いわゆる感情を含めた人間と同等のルーティンを持たせる。その為に人工じゃない。人の脳を移植された思考回路。それがアイツの研究。移植電脳って訳さ」

「そんな事が出来るんですか？」

出来るとは思えない。人の心はデジタルではない。

「俺には出来ないね。普通はそう考える、だが……アイツは俺達と

は違う。違った」

「侘助さん」

どこか哀しい声色に聞える。

「アイツは本当に天才だ。正真正銘の、天才だった」

「そうですか」

思わず健二の声も沈む。それに気が付いたのだろう。侘助の声には明るさが戻った。

「ま、昔の話だ。結局、移植電腦は完成せずに研究も終了。終わって見りゃあ、人工知能を作り出した俺の勝ちさ」

健二はそこで思い出す。自分は移植電腦を知らない。

「でもなんでソレは成功しなかったんですか？ 研究を続けていれば完成だって」

それ程の天才ならばと思う。

「どんな天才だって、死んじまつちゃあ何も出来ない。だから……アイツと一緒に移植電、いや確か名前を決めてたんだったな」

侘助の脳裏にかつての学び舎が思い起こされる。そこで自分に向けられた笑顔と共に、「もうそのAIの名前も決まってる」と言われた。

「ピースメーカー……結局、全部アイツが持ってちまったなあ……？ 彼氏どの？」

侘助の声が遠い。今彼はなんと言った？ 今、確かに

「ちよ！ 死んだって……移植電腦の理論を発表したのは！ 創ったのは桑田さんじゃ」

そう載っていた。確かに。

「？ ああその事か。違う違う。桑田のアホにそんな頭は無えよ」

「！ そんな！ それじゃあ一体」

「桑田じゃねえ。ピースメーカーを創ったのは……創るための理論を構築したのは」

この時、小磯健二にとって忘れる事の出来ない人物の名を、彼は

初めて耳にしたのだった。

「横田一美だよ」

「横田一美？」

理一の問いに春樹はただ笑みを浮かべるだけだ。理一の仲間は素早く人物を検索。すると本部からの無線が意外な事実を告げる。

「有りました！ 横田一美。学生時代に桑田と一緒に研究室に居た人物です。ですが」

「なんだ？」

本部では横田一美のプロフィールが映し出されているが、思わず言葉が止まる。

言いよどむ通信を促せれば

「もう死んでるんです」

「死んでる？」

本部と通信している者の言葉に、思わず皆が注視する。

「はい。今から二十年前。それこそ研究室に在籍中に」

「死因は？」

「交通事故です。手元の記録では即死だったそうです。とくに不審な点も無く、そのまま事故として処理されています」

「そうか。分かった」

通信していた者を見やり、理一は再び春樹に向かう。

「どうやら真犯人説は早々に瓦解した様ですね」

「……」

「貴方の言う真犯人は既に故人です。僭越ではありますが、嘗ての同輩の霊を貶める発言は控えた方が宜しいのでは無いでしょうか」

冷めた視線を浴びせる理一に、だが春樹は態度を変えようとはしない。更に笑みを歪めた。

「彼女が死んでいる事など分かっている。だがこれは彼女の仕業だ。彼女以外にこんな真似は出来ない。出来る訳が無い」

「それはどう言う事ですか？」

自分達の行動に疑念が生じる。

果たして自分達は本当に自分の意思で動いたのか？ と

「そんな事はどうでもいい！ お前達はさっさと奴を捕まえろ！」

叫ぶ春樹に思考を中断させられるが

「無論、我々もそうしたい。出来ましたら貴方にはその手助けをお願いしたいものです。依然として貴方の容疑が晴れた訳では無い。ここらで手を打つのが妥当だと考えますが？ 如何です」

「貴さ！」

感情を昂ぶらせた春樹が腰を浮かせた時、ソレは起こった。

「な、なんだ！ コレは」

それは部屋のテレビ画面。

それは春樹のPCモニタ。

それは理一の携帯電話。

それはインターホンの受信画面。

ありとあらゆる画面に、ただソレは表示された。赤く。紅く。

ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ
ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ ハルキヲワタセ

ワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハ
ルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ
ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワ
タセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキ
ヲワタセ　ハルキヲワタセ　ハルキヲワタセ

連綿と延々と。途切れる事無く明滅し繰り返す。ただ『ハルキヲ
ワタセ』と画面が告げる。

「ひ！　か、一美！」

名前は無い。有る訳も無い可能性に春樹は怯える。その時、キッ
チンから火の手が上がる。

「な！」

「キツチンです！　おそらく電磁調理器！」

「スプリングクラーが動かねえ！　警報もだ！」

事態の急変は一様に混乱を引き起こすが、理一達は各所から集め
られた精鋭だ。その対処もまた迅速。

「まだ間に合う！　火勢は抑える！」

二人が消火器を手に火を消し止める。

「警報が鳴らない。他の部屋の住人へ避難勧告！」

「こちら吉井！　桑田のマンションに消防を手配！　アラートが鳴
って無いのは知ってる！　目の前で燃えてるんだよ！　よろしく！」

慌しく動く仲間達を尻目に、理一は春樹の前に立ち

「どういう事です？」

「何がだ」

「何故貴方が狙われる？　仮に犯人が横田一美の関係者だとして、
何故貴方を狙う？」

「……………」

睨み合う二人の間に、ただ画面は赤い文字を繰り返すだけ。どれほど睨み合っていただろう。ふ、と理一は踵を返すと

「総員撤収。住人の避難と消防の到着を待つて戻ろう」

この場所からの撤退を示す。

「待て！ 私はどうなる！」

思わず身を乗り出すも

「我々は貴方のガードマンじゃない。貴方が我々に協力的で無いのでしたら我々は独自に捜査を続けるだけです。今度は令状でも取って貴方にお会いしましょう。貴方が……生きていればね」

もう用件は済んだと歩き出す理一を、春樹は止める。既にもう、勝敗は決した。

「奴が！ ……一美が私を狙うのは……私が彼女を殺したからだ」

そして皆の視線が集まる中、春樹は椅子に腰を下ろし、全てを語る。

二十年前。

春樹は東大で広瀬教授の研究室に在籍していた。ソコには当時の佗助や件の横田一美も共に。

春樹の目から見ても、当時の仲間の中で、陣内佗助と横田一美は別格だった。

それぞれ研究室においても主軸となれる頭脳を持ち、そして独自の理論も持ち合わせる。佗助の提出した論文は、春樹に彼と自分の差をはつきりと衝き付けるに充分だった。当時、佗助の突飛な人工知能理論に評価の声は上がらなかったが、それでもソレを見抜けた

のは春樹の非凡でもあったのだらう。ソレゆえの絶望もあるが。そして横田一美。

「彼女は天才だった」

柔軟で自由な発想。裏付ける事の出来る頭脳。組み立てる能力、理解する力。そして人望。彼女は美しく、優しく、それでいて飾らない。誰もが彼女に惹かれ癒され励まされ。そんな彼女は

「彼女は私に無い全てを持っていた……どれほど私が望んでも得られない全てを、彼女は当たり前前の様にその手に持っていた……私にはそれが眩しかった。眩し過ぎた」

そして彼女は学生で有りながら独自で移植電腦の基礎理論を構築した。

「ソレを見せられた私は驚いた。彼女のその理論は、我々の十年先を行っていた。私は……その研究成果が欲しかった」

「殺して奪ったと言う訳ですか」

理一の声は暗い。桑田春樹がその発表で世界に躍り出たのは周知だ。そして彼の今の言葉は容易に経過と結果を知らしめる。よく有る話なのかも知れない。が、許される話でも無い。

「積りは無かった。ほんの軽い冗談の積りで言っただけだ。ソレを私に出来ないか？ と。無論、本気じゃなかった。軽い冗談だった……だが彼女はそれに応じた」

「？ 彼女の意思で？ 何故」

「天才の考える事が凡人の私に理解出来る訳が無い。彼女は我々の常識の外に居る。天才とはそういう者だらう？ 翌日、彼女は私を呼び出し、あの場所で私にディスクを渡した」

一美が春樹を呼び出しディスクを渡した場所が、そのまま彼女の死に場所となった。

はい、コレ。と事も無げにディスクを渡された春樹は戸惑った。研究者にとって命とも言える研究成果を、彼女は気にする事無く自分に渡した。

良いのか？ と問う春樹に一美はにこやかに微笑い、埋め合わせはしてもらうわよ。と微笑んだ。

その微笑に見とれる余裕は、春樹には無かった。ただ目の前の天才が自分の理解を超えている事を再認識しただけ。

今度の休みにちよつと付き合つて欲しい。それが彼女の要求。そして、そんなモノよりもつと凄いの、見せてあげるからさ！ と楽しそうに微笑つていた。

「そんなモノ……確かに彼女はそう言った。私が喉から手が出る程欲しかったモノを。凡人には望んでも得られる事の出来ないモノを、あの天才はそんなモノと言い切つた。私には、我慢出来なかつた」それは衝動的だった。

自分の目の前で嬉しそうに立つ彼女を、トン、と弾いた。

彼女の、え？ という声と、自分の、あ、という声が、どこか大きく耳に響く。誰にとつても意外な出来事。そんな不思議な一瞬から現実には引き戻したのは、彼女の姿を掻き消す様に現れた一台の乗用車。

激しい衝突音が響き渡つた後に残された生者は自分一人だった。

彼女は即死し、勢いで電柱に激突した乗用車のドライバーも死んだ。彼は

「私は逃げ出した。証拠は無い。アレは事故だ。私は、一美を殺す気なんてなかつた」

「だが結果彼女は死んで、今、貴方の命を誰かが狙っている」

「私は……私は悪くない！ 悪くない！」

頭を抱えた春樹を、理一達は冷徹に見詰めるだけだ。火を消し止めた者達も集まり、どうやら消防も到着したらしい。ココにもう用は無い。

「貴方の言い分は理解しました」

「……………」

突然飛び出した春樹を、そのダンプカーは避ける事が出来なかった。

「な！ 嘘だろ」

「馬鹿な」

「なんて……」

理一達の前には、無残な姿を晒す桑田春樹だったモノが横たわっていた。

呆然とする一同に、それでも赤い文字は留まる事を知らない。ただ必要に、ただ整然と。ハルキヲワタセと繰り返す。

p i p p i p p i p p i p p i

そのコールが新たな始まりを告げる事を、理一は知らない。

「はい陣内………！ なんだった………」

驚愕の表情で固まる理一を一同が訝しげに見る。その顔色を失った理一は、どこか呆然と春樹だったモノの姿を眺めていた。

「送ってくれてアリガト」

「いえ。食事、美味しかったです」

「ふふ、どう致しまして。じゃあ……おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

夜も遅いからと夏希を彼女の家まで送った。その帰り道、健二はゆっくりと帰路につく。

考える。

侘助は過去の事を色々と話してくれた。桑田春樹、横田一美、それに侘助。確かに在った彼等の青春。

一連の事件に何がどう絡んでいるのかは健二には分からない。どこか頭に引っ掛かりを覚えはするが、今の健二の場所からは何一つ見えてくる物は無い。

ただ理一に言われ暗号を解いた。それだけ。そこに何の意味があるのか、もしくは有ったのか。それすらも分からないのは釈然としない。ラブマシンの時の様に、知らずと引き金を引いてしまう事もある。

「やつぱり今度からは断ろう。なんか恐いし。暗号には関わるな！これはもうボクの大原則だな、うん」

そんな決意をした矢先、健二の視界に一台の車が飛び込んで来た。凄まじいブレーキ音を響かせ急停止する。

「？ あれ？」

止まるや中から飛び出して来たのは昨夜健二を送り届けてくれた理一の仲間の女性捜査官だ。

「？ あの、どうしたんで「健二君急いで！」！　　ってうわ！　　ちよちよちよ」

有無を言わず健二を車に押し込めた彼女は「出して！」ドアを閉めるのも待たずに車は走り出した。

「一体なんなんですか！」

いくら温厚な健二でも流石に声が大きくなる。コレではただの拉致だ。

「やられたわ。私達は犯人に嵌められたの」

「え？」

健二への回答なのか事情説明なのかハッキリしない。だがその表

情は反論を許さない緊張感があつた。

「犯人は桑田を探していた。そして私達に探させる為に事件を起していた」

「それじゃああの足跡は」

「私達に桑田の掛けたプロテクトを解かせてアイツを探させる為に……私達は犯人に利用されたの」

「そんな！ それじゃあボクは……ボクが」

また、自分は引き金を引いてしまった。暗号に関わるとロクな事が無い。それは健二にとっての真実の様だ。

「違う！ 健二君じゃない。私達が利用されたの！ 貴方は何も悪い事はしていない。それだけは間違えないで。いいわね」

「……はい」

だが健二に納得は出来ない。そんな気分の中、車は猛スピードで交差点を突っ切った。気が付けば自分の車からサイレンが聞える所を見ると、コレは覆面パトカーなのだろう。だがそれにしても「ちょ！ 幾らなんでもスピード出し過ぎじゃ。さつき隣で事故りましたよ！」

健二達の車を避ける為に接触事故があつたのを目撃した。幾らなんでも無謀だ。

「奴の方が速いんだ！」

「え？ って何言って」

運転手は一向にスピードを緩める気は無い。代わりに隣の女性が健二に言う。

「犯人はハルキヲワタセと要求しているの。見て」

言われて見た彼女の端末画面にはビッシリと赤い文字が並んでいた。ただハルキヲワタセと繰り返し。

「これは」

「桑田春樹の周囲、それに私達の本部や他にもあちこちに。もうずっとコレの繰り返しよ」

「桑田さんを渡せと？」

「でもソレはもう出来ない」

「？ 何ですか」

民間人を危険に晒す訳には行かないのだろう。テレビや映画の知識は彼にそう告げる。だが理由はそんな倫理的なモノじゃなく、物理的なモノ。

「桑田春樹は死んだの。さっき事故で、即死だった」

「死！ ……それじゃあソレを伝えれば」

「伝える術が無い。死んだ情報も流したし死亡届もインプットした。でもコレは止まらない。もう力づくで止めるしか手は無いの！」

彼女に焦りが見える。

「止めるって、この画面ですか？」

「違うわ」

「え？」

彼女の否定が分からない。その回答は運転席の男性捜査官から帰ってくる。

「奴は原発を乗っ取った。現在冷却効果が減少中。このままいけば炉心部は温度の上昇を続け……炉心融解を引き起こす」

「メルトダウン……嘘」

呆然とする健二の手に女性捜査官の手が重なる。

「今、技術者や関係者が総出で阻止を図ってるの。貴方も手を貸して」

「でも何処の原子力発電所が」

「アチコチよ」

「……え？」

声が遠くに聞こえる。

「世界各地、現在三十二箇所の原発が奴の手の中だ」

「さ、三十二箇所って。そんな」

「悪いけど余裕無いの。協力、良いわね？」

その確認に必要なは有ったのだろうか？ 断る選択肢が始めから用

意されてはいないのに。だがそれでも、この件に関わった者として、そこに自分が出る事が有るのであれば、自分に出る事をすれば良いんだとアノ人は言った。だから

「はい」

「ありがとう。健二君」

ミラー越しに健二の表情を伺う男に笑みが浮かぶ。

「二人共ベルトを締めろ……………とばすぞ」

更にスピードを増す車の窓から流れる景色に、健二は自分がまた見えない何かの激流に呑み込まれて行くのを感じていたのだった。

中編（後書き）

思わず長くなりました。

後編の長さが心配です。

次回後編で完結になります。

後編

明るい陽の光の下、午前中の一時を公園で過ごす侘助は、さつき健二に話していた事を思い出し出していた。

「忘れていたんだな………一美、か」

脳裏に浮かぶのは嘗てのキャンパス。あの日もこんな空の高い日だった。

「研究を？ 桑田に？」

「そ！」

こんな自分に明るく話し掛けるのは一美だけだった。東大一人気者が何故自分なんかに？ とも思ったが、ソレすらも気にしない事も彼女の人気の秘密なのだろう。だがコレばかりは不思議で仕方が無い。研究者にとって研究成果は何よりも大切なのに。

「冗談だろ」

「？ なんで？」

「いや」

くれないか？ うん、あげる。なんてやり取りの方こそ何で？

と聞きたい。

「侘助があんな論文出すから春樹も焦ったんでしょ。まあ気持ちも分かるしょ。うんうん」

「は！ 散々叩かれた論文だぜ？」

「ふふ。ソレは皆に見る目が無いからよ。でも春樹だって凄いと思ってたから焦ったんだよ？ 勿論、私だって凄いと思ってるんだから」
笑顔で話す彼女が眩しい。

「ふん。反対の癖によく言うよ」

「あら？ 賛同する事と評価する事は同義じゃないわ。自分の考えと違っても凄いモノは凄いのよ。知らなかった？」

「はいはい。そいつはどうも。お前に評価してもらって俺も嬉しいよ」

「ふふ。どうぞ致しまして」

「こんなやり取りが楽しいと感じる。

「でもだからってお前の研究をアイツにやるこたあ無いんじゃない？」

「ん〜。別にいいよ」

「気にはしない。全く。」

「全く、どういう事なんだろうなあ。俺には分かんねえな」

「もういい。とばかりに芝生に寝転がる侘助に、一美は笑みを浮かべて言う。

「そんなの決まってるじゃない。惚れた弱みよ」

「……………は？」

「思わずマヌケな声が出る。自分でも恥ずかしいのだろうか？ —

「美の顔も少し赤みを帯びていた。

「あら？ 知らなかった？」

「知らないも何も。え、ってお前、桑田を」

「そうだよ」

「何時から」

「ん〜…………… 忘れた。それ位前から」

「はあ？」

まさかの告白に固まった。あの横田一美をしてなんで桑田なのか？ と誰でも思うだろう。だが侘助にとってはソコが彼女の彼女たる所以なのだろうと思う事が出来る。

「ま、別にいいけどよ。にしてもだからってタダでくれてやるかね
もう呆れてしまう。」

「別にタダじゃあげないわよ」

「ん？ 金でも貰うか」

「ば〜か。そうね、今度の休みにでもデートして貰おうかな。へへ、良いでしょ」

一美の顔は照れながら、それでもとても嬉しそうに笑っていた。この顔が出来るのならば、ソレはソレで良いのかも知れない。

「はいはい。精々楽しんで来いよ、お嬢さん」

「ありがと。侘助ならそう言ってくれと思うた」

(そりゃ、俺以外に言えば大問題だわな)

「じゃあお礼に、あんな資料よりもっと凄いの、見せてあげるね」
彼女の研究資料よりも凄いモノなど有るのだろうか？ と疑う。

「なんだよ、ソレ」

「ふふ。まだナイショ！ こういうのはやっぱ彼氏が真っ先に見るべきなのよね。だから春樹に見せてから貴方にも見せてあげる」

どうやら彼女の中では既に恋人になる事は前提の様だ。

「ソイツはどうも。それにしても、まさか桑田の後とはね」

どこか、彼女とは他の生徒よりも近いモノを感じていただけに愚痴っぽくなる。

「妬かない妬かない。春樹の次に侘助に見せてあげるからさ」

「楽しみにしてるよ」

「しててしてて！」

暖かい陽の下で、鮮やかな緑の上で、彼女は楽しそうに笑っていた。

だからこそ、侘助も笑顔で言えた。

「上手く行くといいな、一美」

「うん！」

その微笑みは、侘助が見て来た中で、一番眩しい笑顔だった。

そんな事を、今朝健二に聞かせるまで自分も忘れていた事に苦笑した。俺も歳を取ったものだ、と。

ふ、と見るとノートパソコンが何かに反応しているのが分かった。メールだろうか？

何気に開いた侘助は、その画面に固まった。

「なんだ？ コレは」

ハルキヲワタセ

一面に現れたその文字は、侘助の目にはどう映っていたのだろうか……

「後十五分で福島第二原発！ 危険域に入ります！」

「ドイツ、アメリカ……ロシアで二つ！ 危険域に到達しましたっ！」

テロ特機の本部はまさに戦場と化していた。慌しく走り回る職員や捜査官。飛び交う怒号。中には集められた技術者達も多くいる。そしてその中に、必死でノートに数字を書き殴る健二の姿も在った。本来は外部からの不正な侵入を防ぐ為のセキュリティが、今は強固な防護壁となって彼等の前に立ち塞がる。

OZのモノに比べれば幾分は容易だ。だがまがりなりにも原子力発電所のセキュリティコードである。簡単に解けるモノではない。だが

「！ 退いて下さい！」

数人の大人を払い除ける様に飛び付きキーボードを叩く。

おおおおお！ と歓声が上がリ、健二は福島第二電子力発電所を
取り戻した。

「よし！」

思わず拳を握る。すかさず隣に居た技術者が原子炉の冷却を開始
する。

「やったな健二君」

「いえ！ 次です！」

言うや健二は別の原発に取り掛かる。ソレを機にアチコチで声が
上がる。

「あ！ アメリカ、コントロールを取り戻しました！」

「ドイツ、ロシアも一つは取り戻した模様」

世界中で戦いが有る。だが、皆で戦うのだから希望は充分にある。
そんな光を見出した瞬間……

「！ 馬鹿な！」

冷却装置を操作していた技術者が悲鳴にも似た声を上げる。

「どうした！」

「ま、また乗っ取られました！」

「な！」

福島第二原子力発電所は再び犯人の手に堕ちた。そして

「うそ！ こん……ドイツ、ロシア、再び暴走！」

「アメリカも同様！ コントロール奪われました！」

イタチゴッコだった。

その後も世界中で原発の権限を取り戻し、瞬く間に奪い返されて

しまった。

確かに取り戻し新たにロックを掛けた。だがソレが直ぐに破られ再び締め出される。劣っているのはスピードだった。圧倒的に。絶望的なまでに。

自分達が数十分掛けて、数十人、数百人、或いはもっと大勢の人員を掛けて、それでも犯人のスピードに歯が立たなかった。

「く！」

「え？ もう！」

誰かの驚く声も全く耳に入らず、健二はキーボードに向かい権限を取り戻す。しかし

「よし！ 入っ！ 駄目です弾かれました！」

「ちくしょう！」

ドン！ とキーボードを叩く健二に一瞬静まり返る。だが、ココに居るのは精鋭だ。テロと戦う為に集められた者達だ。たとえどんなに絶望的でも、ソレに負けない精神力は皆持ち合わせている。

「諦めるな！ 続けよう！」

トップと思しき人物の声に、ハイ！ と全員が応じ戦場は加速する。

？ と誰かが気付く。

健二は独り、ブツブツと独り言を言いながら立ち尽くしていた。

(やっぱり……高校生には酷な話よね)

気が付いたのは健二を連れて来た女性。例え意気を失ったとしても健二を責める者はココには居ない。大人の自分でもギリギリの精神状態なのだから、それは寧ろ当然と言えるだろう。

少し休ませよう。そう思い健二に近付いた彼女は健二に近付いた所で足を止める事になる。

健二はモニターを眺めながらブツブツと独り言を言っていた。その目に……………鋭い光を宿しながら。

「個別に対処してちゃ間に合わない……………パスワードの規則性を見つucker? いや、無理だ。じゃあ……………どうして勝てない? 遅れてる。違う……………始めから勝てやしないんだ……………こんな事してたつて三十二箇所全部は間に合わない。アイツは見てるんだ。見て、追つて来る……………逆探知? 出来るならしてる。どうして……………見えないんだ。敵が……………犯人はどうやって見てる? どうやって……………奴が一気に手に入れたのなら……………全部に繋がってるんだ……………」

諦めてなどいない。立ち尽くしてもいない。ただ彼は考える。この問題を解く答えを。

目の前に難問が設けられた。数学ではない。だが解かなければ成らない問題が、その難攻不落の難易度を持って自分の前に差し出される。不謹慎である事は重々承知している。だが健二は確かに……………今のこの状況下にあつて、気分が昂ぶっていくのを感じる。

アナタが出した問題に、ボクは今臨みましょう。

自分にそう暗示を掛ける。

現実には押し潰されては何も良い答えは見付からない。気持ちを切り替え、頭を切り替えて事に臨む。

「全部に……………三十二箇所全部に? そう、三十二箇所に……………な

んで……三十二箇所なんだ？」

「健二君？」

思わず彼女が声を掛けるが、ソレも耳には入らない。

ヨロヨロとモニターに歩み寄る。既に幾人かも健二の様子に注視していた。

「……ラブマシーンが把握した原発は五百箇所以上……なんで三十二箇所なんだ？」

「そりゃあ、侵入出来たのが三十二箇所だったんだろう」

隣に居た技術者が健二に答える。彼もまた、健二に目を奪われていた。

「セキュリティの度合いは一緒なのに……この犯人には簡単に出来る筈なのに……どうして……五百じゃ駄目なんだろう」

「アシが付くのを恐れてつて言うのも有りじゃ無いか？」

警察から出向らしい意見を言う。

「流石に五百以上もの場所に一齐にアクセスすればこっちにも向こうを追えるからな」

技術者も答える。今は敵が見えない。まさに防戦一方だ。

「……そう、見えないんだ……確かに犯人と繋がっているのに……」

……痕跡を隠す？ でも……いつから」

「それは、やっぱり犯行に及んだ時からじゃないかしら？」

「いや、多分もつと前からじゃないか？ じゃなきゃ俺たちも追える筈だった」

「今でも追えるだろう」

「あのメッセージの所為でOZ中が混乱してる。今となつちや探し様が無い」

何時の間にか皆が集まり意見を出し合う。誰に振り返る事もなく

ただ呆然とモニターを眺め呟く健二が、今、ココの真ん中に居た。

「違う……五百箇所を必要としなかったんじゃない……三十二箇所を使っただけだ！」

「健二君？」

理一の声に応えるかの様に、健二はようやくモニターから目を離し辺りを見渡す。

「犯人は犯行の為に原発に侵入したんじゃない。ソコに在ったから利用したんです」

「まさか」

「奪おうと思えば五百箇所以上の原発も奪えた筈です。でもしなかった。きつとその必要は無しと踏んだんです。だったら」

健二の表情は確信に満ちていたが、些か裏付けに事を欠く。

「だからと言って君の意見が正しいとは思えない」

声のする方へ向き直る。

「選んだにしているこの三十二箇所は不特定過ぎます。それに大した共通項も無い。第一、侵入の痕跡も無いんです。きつと始めから内部に犯人の手が入ってた。奪い、操作し、鍵を掛ける。多分、痕跡はあります。でも皆が権限奪還の為に集中してアクセスしている以上、ソレを見つけるのは困難です。難しい話じゃない……在る物を利用して姿を消す事なんて……そう。簡単に出来ません。これ程の犯人であれば」

一瞬、背筋に走るモノを感じる。ソレ程迄に、健二はどこか楽しそうだった。

「有る筈なんです……この三十二箇所の原発に有って、他の五百近くの原発に無い何か……きつと有る」

「だとしても、それが一体」

「ソレこそが犯人の通った道なんです。ソレを辿れば見つけれられる。この事態は、もう犯人を抑えて根本の命令を消さない限り解決出来ません」

そうして一斉に始まった。

すでに原発の奪還には手を付けてはいない。確かにソレも必要なのかも知れない。だがそれでは既に遅きに失する事は明白だ。現にあれからも世界中で奪還と再度の消失が繰り返されている。ならば、ココに賭けるしかない。

「電話、電力は駄目だ。機械メーカーは？」

「タイムスケジュールはどうだ？ 実験開始の時刻とか」

「日本だけなら幾つか挙げられそうなんだけどなあ……世界となると」

「アメリカ、中国……ああ！ なんでココ使ってないんだよ！」

共通項が見付からない。ソレは次第に焦りを伺わせる。

三十二箇所に共通する項目は幾つか挙げられるが、ソレは他の原発にも言える事になる。原子力発電所には膨大なデータ通信が必要となり、ソレは複雑で煩雑だ。無論、一般の回線やデータも有る。どれも一応に共通であり独特だ。

「時間、場所、設備……有る。きっと答えは有る……何時、何処で何を……」

健二もまた思考の海に埋没しそうになった時、この室内の何処かで誰かが言った。

「ああ！ コレも駄目！ ったく、一体何だつてこんな事しやがんだよコノ馬鹿野郎はよ！」

ソレはただの罵声に過ぎず、皆も気にせず作業を続ける。言った本人すらも同様に。

だが健二が止まる。

「……………そ……………うだ……………ソレだ！」

健二は大声で叫び原発のデータを洗い出し始めた。

「け、健二君？」

理一が思わず声を掛けると、健二は激しく操作しながら声を発した。

「犯人はどうしてこんな事をしたんでしょう」

「え？ だから」

「ハルキヲワタセ！ この為です」

それは分かる。余りの事態に一瞬忘れがちだが、確かにソレが目的で、その為のこの事態なのだろう。だが彼は死んだ。もうソレは果たされない。

「しかしもう彼を渡す事は出来ない」

要求に応える形での解決は有り得ない。

「そうです！ 彼を渡せと脅しを掛けた。彼を渡せと訴えた」

「健二君？」

理一の声も聞えないのだろうか。

「彼を見付ける為に理一さん達を利用した。ボクに彼が掛けたプロテクトを破らせた」

「それが一体」

「彼に導く為に足跡を付けた。世界中で事件を起した」

健二は激しく画面を切り替えながら、そして最後の画面に辿り着き、ようやく一同に振り返る。

「でも……その前は？」

「？ 前？」

「そうです。きっと自分で捜した。必死に、懸命に、そして必要に。犯人は彼を捜した……桑田春樹を……犯人は捜してるんです」

「健二君？」

そうして健二は回答を出した。

「答えは『クワタ』です」

「クワタ？」

「そうです。本人を見付けられない。だから捜す。知人、友人、親戚、家族」

そこで刑事だった者は理解する。

「そうか。張り込んだのか」

「そうです。無作為に、無差別に、徹底的に……犯人は『クワタ』の姓に張り付き待ったんです。いつか桑田春樹に辿り着くのを」

だから……三十二箇所。

「三十二箇所の原発全てに、『クワタ』の苗字の人間が居ます。技術者、一般職、警備員。役は違っても必ず居ます。そして、ココ以外の原発には一人も居ない。ただの一人もです」

それが三十二箇所を占拠した理由。日本の技術水準は世界屈指だ。人材の派遣はそれこそ世界中に渡る。

「だったらソコから足跡を辿れば」

「ソレは無理です」

トップの声に答えたのは技術者達だった。

「さっき健二君が言った様に、現在原発を取り巻く回線はアクセス

が集中し過ぎてます。OZが正常に機能している時ならいざ知らず、この状況下での判別は不可能です」

「木の葉を隠すなら森の中ってトコです。忌々しい事にね」

「もつと状況がクリアになればいいんですが」

やはり状況は良くは成らない。そう思ったが

「だからクリアな状況で探します」

健二は明るく言い携帯を見るが

「……………駄目だ。誰か居ませんか！」

叫ぶ意味が分からない。

「友達でも仕事関係でも何でも構いません！ 『クワタ』と言う名前の人を知ってる人、誰か居ませんか！」

自分の携帯にはそんな知り合いは無かった。ココに居なければ、それで全てが終わる。

皆、自分の知人を脳内で検索するが、健二の目の前に「……………あの……」と一人の女性が手を上げた。

つい先日、此方に配属になったばかりの新人であったが、彼女はおどおどと、それでも皆の耳にソレは聞えた。

「私、桑田美也子って言……それだ……！！」
「ひええええ！」

怯える彼女には申し訳ないが、今はソレに付き合っている場合ではない。

「OZのアカウント、持ってますよね？」

「え、ええ」

「ログインしてください早く！」

「は、ハイ！」

高校生の健二に急かされまくって必死で携帯をデスクの端末に接続する。慌てている彼女から携帯を奪い素早く技術者がセットする。

「っと……はい。コレが私の「失礼します！」きゃ！」

まさに押し退ける様に健二が滑り込みキーを叩いていく。この際プライバシーは忘れて貰う。そして

「……………！ 有ったコレだ！」

幾つもある足跡。その中でただ一つ。無名で何も無い訪問者が居た。名前も姿も無い。ただソコに足跡だけが残る。無論、彼女自身も知らない訪問者。

「コレを追います……っと！ プロテクトが」

OZのアカウントの個人情報を見ようとしている。無論、OZのプロテクトには引つ掛かる。

「OZに協力要請！ セキュリティの解除を！」
トップの指示ではあるが

「！ 駄目です！ 現在OZも例のメッセージと原発で回線が混乱収集が付いていません。連絡が取れません！」

「ちっ！ 政府権限を出しても構わん！ 最優先だ！」
言い分も分かるが無理なものは無理だろう。

「時間が有りません。こじ開けます！」
「健二君！」

言つや健二はノートに数字を殴り書く。

その必死の形相は見る者の心を凍らせる。

ソコには戦いが有った。

姿の見えない敵と、眼前を埋め尽くす数字と、健二は戦う。

「……………！」

ノートを投げ捨てキーをタイプする。技術者達が驚愕する早さだった。

「！ 開いた……………これだ！」

健二が見つけた確かな痕跡。桑田美也子に今も張り付いている犯人へと続くライン。それを辿る。

既に幾つかの原発が危険域に達している情報がモニターに映し出されている。一刻の猶予も残されてはいない。

(どこだ……………どこだ……………)

その場に居る全員が固唾を呑み見守る。そして……………辿り着く。

「もう……………少し……………って、コレ」

健二と共に追う技術者が言葉を失う。そして健二もた驚愕する。

「これ……………セントラル……………ゼロポイント！ OZ管理塔の真下……………？」

「そんな！ ココで途切れてるなんて！」

「馬鹿な！ じゃあ何処から指示してるっていうんだ！」

このラインはOZの管理塔の真下で完結していた。そんな筈は無いのに、だ。

アバターに繋がればアカウントに辿り着く。アカウントにはどこ

からアクセスしているのだろうか？ そう、繋がる。筈だった。

だが、これはOZで完結していた。まるであのラブマシンの様に。OZに放たれ、OZで生きたアレの様に。

つい数時間前に侘助に聞いた話が脳裏に蘇る。

そう……彼女は確かにそう言ったそうだ。「もっと凄いのを見せてあげる」と。

移植電腦の基礎理論よりももっと凄いモノ。

「……………完成……………してたんだ」

健二はまさに実感した。その今は亡き天才の、その才能を。既に彼女は完成させていた。その名とは正反対の現実を顕現させようと動く、彼女、横田一美の最高傑作。

「……………ピースメーカー……………」

* l o g i n *

それは暗闇の中で光を放っていた。全ては自分の中に有った。

ヴォン……………ヴォン……………

少し、光が強さを増した。何かが、動き出したのを知る。

「じゅあ、これは全部AIの仕業だって言うのか！ この間のラブマシーンみたいに」

「多分！」

「まったく！ 次から次へと何だっただよ！」

ケンジと数人のアバターはOZ内を飛んでいた。管理塔を目掛け一直線に。

ケンジの言う様に一連の事件がAIの仕業であるのなら、自分達人間はまたしてもコンピューターに翻弄された事になる。やり場の無い怒りも込み上げると言う物だ。だがそれならそれで好都合でもあるのだ。

「考え様です。もしそうなら、ココで奴を叩けばソレで解決です。

何もかも」

「足を運ぶ必要も無いか」

「はい！ ……見えた！」

その為に、今皆でソコに向かっている。

OZの管理塔が映し出される。ココの最下層にソレは在る筈だ。一気に管理塔へ突入しようとした時、「！ うわ！」と誰かが弾かれた。

「え？」

「なん！ うああ！」

「何だよこいつ等！」

管理塔の周囲には他のアバター達も終結していた。ケンジ達の動きに連動して、それこそ世界中から。だが、そうして辿り着いた管理塔の周囲では、激しい戦闘が巻き起こっていた。

戦闘、では無いのかも知れない。ソレはただ弾き飛ばされていた。

管理塔の周りには無数の、それこそ数え切れない程の、目玉が飛び交っていた。

目玉は猛スピードで襲い掛かり、その全てを弾き飛ばす。

「犯人を護ってるんだ！」
「ち、くしょーがあー！」

バトルフィールドでも無いのに当たり判定が出る。だがラブマシン
の様に変更はされていない。要するに一方的な攻撃だ。皆は
必死に避けている。だが目玉の動きは早過ぎてアバターの操作が追
い付かない。

新たな原発が危険域に到達した。もう時間が無い。

「このおおお！」

ケンジが無謀にも突入するが、「え！ うわああ！」と直ぐに弾
かれる。

そして更に追い討ちが掛かり、無数の目玉がケンジに襲来する。

「くそ！ 間に合わないのか！」

健二も理一達も、他の場所からアクセスする世界中の者も、ケン
ジに襲い掛かる目玉を見送るしか無い。無かった刹那

バキキイイイ……ン。

無数の目玉が霧散した。

「……………間に合ったみたいだね……………ケンジさん」
「カズマくん！」

赤いダウンジャケットにゴーグル。ピンと伸びた二本の耳のウサ
ギ人間。キングカズマがケンジを庇う様にソコに在った。

「キングカズマ！」

「キングだ！」

「キターーーーーー！」

一斉に声援が上がる。

ふ、と気が付くと見知った板子ヨコメガネが居た。

「ギリギリ間に合ったな」

「サンキュ！ サクマ」

「全く、なんでお前は次から次へと巻き込まれるんだよ」

「ゴメン」

ピースメーカーの犯行を予想した時、健二は佐久間と佳主馬にメールを送っていた。佳主馬にはOZで荒事が起きそうだから手を貸して欲しいと。佐久間には万一に備えてバトルモードのエリア情報変更を頼んでいた。

夜中にも関わらず健二が強引に打った二つの救援要請が、まさに間一髪で間に合った。

「管理塔周辺の情報を書き換えた。これで反撃出来るぞ」

「助かるよ佐久間」

OZの技術者に協力を要請し、急遽情報を書き換えた。佐久間の腕と日頃からのOZ内での人間関係の賜物だろう。

付け加えるなら、この事態に際し、カズマやケンジと云った先のラブマ事件の英雄の為にと云うのも多分に有ったのも間違いない。

反撃可能に成った事で、管理塔周辺では目玉とアバターの本格的な戦闘が始まりだした。

ケンジ達にも目玉は襲い掛かるが、立ちはだかるカズマの前に次々に吹き消されていった。

「カズマくん！ ココはいいから早く管理塔の最下層に！ ソコに犯人が居る！」

「分かった……二人とも掴まって」

「へ？」 「うおおい！」

捕まって。と言うより二つのアバターを抱き抱えて、カズマは正に一直線に管理塔を降下して行った。

「「うああああああ」

急激に近づく塔の底に、思わず目を背けるが

「ゴガン！ とカズマは下層の底をぶち破って着地する。そこはもう

「ここだね」

「ああ」

最下層のフロア。暗闇の中だった。

カズマとケンジ、サクマは暗闇を飛ぶ。健二が掴む痕跡の元はすぐソコだ。そして

「！ コイツが？」

「おいおい。ガチで？」

「そう……君が……ピースメーカー」

ヴォン……ヴォン……

ソコはまるでドームの様に何も無い空間。ただその中央に光を放つモノが在る。その姿は

脳の様だった。

脳から伸びたコードが床に刺さり脳を支える。辺り一面にコードが広がり壁に縦横に差し込まれている。

浮かぶ無数のモニターには様々な光景が映し出されている。

塔の外での戦い。

原発の状況を示すモニター。

明滅する「ハルキヲワタセ」の文字。

そして、ケンジ達の姿。

「気持ち悪いけど潰すよ！」

まさに疾走すると云う言葉の通り、カズマはピースメーカーへ向う。が、ソレは直ぐに止まる事になる。

「な！ なん！」

無数のコードがへビの様にうねり、カズマに襲い掛かった。

「この！」

カズマにしてみればかわせぬ攻撃ではない。かわして、飛び込んで破壊する。それが可能なスピード。の筈だった。だが、次の瞬間

「うが！」

カズマは弾き飛ばされていた。

「カズマくん！」「キンググ！」

ケンジとサクマの声に応える様に素早く立ち上がり、再び構える。襲い掛かるコードをかわし、再び接近を試み、また弾き飛ばされる。

「くそおお！」

思わずケンジも殴りかかるが、あつと言つまに弾かれる。カズマに繰り出されたモノに比べたら子供騙しの様な攻撃だが、健二にとっては十分な攻撃だ。

「ケンジさん！ くそお！」

カズマも意気を発し一気に弾け飛ぶ。跳び、跳ね、かわし、捌き、ようやく懐に入れたかと思いきや足首を絡め取られ壁に投げ付けられた。

激突して落下した先に居たケンジの上に落下する。

「げあ！」 「役に立ったじゃないか、ケンジ」「うるさい」

クッション代わりにはなれたらしい。それでも事態が好転した訳じゃない。

「くそ！ カズマくんでも駄目なのか」

「演算だよ！」

「サクマ？」

サクマには戦闘の技術は無い。が、見ていて気付いた事が有る。

「キングの動きをシュミレートしてるんだよ。過去のデータやさっきの目玉とのやり合いからキングの動きを予測してるんだ！」

「そんな」

「ボクのか？ だからか！」

どうにも自分の思う様に動けないと思っていた。キチンと動いているのに、どこか動かされている気がした。

「そうと分かっていたらば！」

立ち上がり駆け出した、瞬間「な！」カズマは躊躇し、再びケンジ達の所まで弾かれた。

何時もと違う動きをしようと思った。が、跳ぼうと思った場所から突如コードが飛び出した。そして別方向からの攻撃に遭ってしまった。

「そんな簡単な演算能力じゃない。もっと、なにか別な」

「でも時間が！」

カズマにも焦りが見える。サクマには打つ手が見えない。そして

「カズマくん」

ケンジがカズマの肩に手を掛け、今一度飛び出そうとするカズマを制し前が出る。

「ケンジさん？」「ケンジ？」

一瞬、ケンジはカズマとサクマを抱き寄せ、しっかりと抱き合う。ほんの数瞬、時が止まるかの様な静寂。

「お前……」

「……………」

二人を放し……………。ピースメーカーに向かい合うケンジは告げて駆け出す。一言。

「頼んだよ」と。

突撃してくるケンジにコードが向う。ケンジにはコレでいい。自分が警戒するのはあのウサギのAvatarだと認識している。だが、コードがかわされた。

修正……………演算……………攻撃開始。

二本のコードがケンジを襲う……………かわされ、弾かれた。
ピースメーカーの意識がケンジに向う。

自分は二度、アレを攻撃した。アレは二度、自分の演算を超えて
ソレを回避した。

修正……………演算……………攻撃……………再修正……………演算……………演算……………
攻撃……………再修正……………

それは有り得ない事だった。過去のあらゆるデータに基き、全ての
パラメーターを計算し、あのタヌキの動きを演算し回答を出した。
だが回答を上回る動きを見せタヌキは駆ける。跳ぶ。そして……………自
分に拳を振り上げた。

バキイ。と音がする。

コードを盾として使う。タヌキのパラメーターではこの盾は破れ
ない。タヌキは弾かれ自分の計算に誤りが無い事を実証する。だが
……………かわされた。

不可解。不可能。過去のどのデータを駆使しても、ケンジのこの
動きは有り得ない。

ピースメーカーの大演算機能をもつてしてもケンジの動きが予測
出来ない。自分の得る事の出来るどのデータを持ってしても……………こ
のケンジの動きは見切れなかった。

佳主馬の操るケンジの動きを……………健二の操るケンジのデータ
からは、どの様に演算しても回答を導き出せなかった。

ピースメーカーはラブマシンの騒動を傍観する事によって知識
を得ていた。アバター・アカウント・現実と仮想現実。その関係性

を理解した。だが理解出来ていない部分があった。人間にとって、自分もこの空間も、このアバターですらも、一つのツールに過ぎない事を。ケンジを操る為に必要なのは権限を奪う事。それは先に実証を見た。が、ただパスワードを伝えるだけで、人は誰でも操れる。その一点をピースメーカーは考慮しない。自分にはパスワードは存在しない。権限を奪われない限り我は我なのだから。

健二の操るケンジには絶対にかわせない攻撃を、佳主馬が操るケンジがかわす。

健二は一つ目の賭けに勝った。
五百箇所以上を奪えたのに、ただ簡単に手に出来て十分に効果を発揮する三十二箇所で行動を開始した。ピースメーカーは最も効率の良い方法を選択すると踏んだ。

佳主馬が操るケンジが予想を超えたからと云って最大限での攻撃はしない。再演算し、効率のいい攻撃を重ねる。かわされても、わかされても、飽きる事無く何度でも。かわされても、またケンジが蹴りを放つ。が盾は貫けない。

「駄目だ！ ケンジのパラメーターじゃどうやったって」
サクマの言ってる事は分かる。だからコレが二つ目の賭け。
「だから……」

カズマが駆け出す。ピースメーカーに向かい真っ直ぐに
コードが真っ直ぐ襲い掛かり……カズマに当たる寸前で右上方に
跳ね上がる。

この時、健二は二つ目の賭けに勝った。

カズマは跳んで避ける。筈だった。

佳主馬のカズマが跳ぶ筈の方向に、健二のカズマは跳ぶ事なんて出来ない。そんなに素早く反応なんて出来無い。しかし反応出来てしまっピースメーカーは攻撃を空振りさせる。

「……こっちが……」

拳を振り上げるカズマに盾を向ける。

「本！」

カズマの拳が盾にめり込む。たとえ健二が操ろうとも、カズマのパラメーターが変わる事は無い。

バキィン。と盾を突き破る。

「命！」

その拳がそのまま脳へと襲い掛かり

「だあああああああああ！」

そのまま………ソレを打ち砕いた。

眩しい光が放たれる中、かすかにだが確かに、脳を形どったアバターは、砕け散ったのだった。

瞬間、全ての原発のコントロールを取り戻した。

「成功です！ システムオールグリーン！ …………… 原発、取り戻しました！」

どこか涙ぐむ声で事態の收拾を告げた者に呼応して、

おおおおおおおおおおお！

全ては歓声に包まれた。

それはココだけでは無いのだろう。多分、世界中の至る所で見られる光景なのだろう。

理一が健二の下へ向うと、健二は黙って机に顔を埋め座っていた。泣いているのか？ とも思ったが、ソレを覗いて思わず優しい笑みを零す。

その光景に気が付いた者達が同様に近付き、同様に笑みを浮かべる。

健二は…………… 静かな寝息を立てながら、眠りに落ちていた。

事件解決の安堵感か、頭脳を酷使した疲労か。もしかしたら昨夜と今夜の二夜連続の事態で寝不足だったのか知れない。もう時間は三時を回っている。どちらにしても、今、彼に掛ける言葉はコレしか無いだろう。

「……お疲れさん……健二君」

そつと上着を掛ける理一を、一同は静かに見詰めるだけだった。共に同じく、慰労の言葉を心で告げながら。

「すみません。送って貰っちゃって」

助手席で恐縮する健二に理一の方が笑みを洩らす。彼が恐縮するのも可笑しな話だ。

「いや。また君には助けられたからね。コレくらいじゃお礼の足しにも成らないよ」

「そんな」

結局、健二が目覚めたのは十時を過ぎた時間。当然学校には間に合わない。それでも、と取り合えず家に行き支度を済ませれば玄関には理一がいた。

「学校まで送っていくよ」

申し出は素直に受けた。まあ三時限目には間に合いそうだ。

ふ、と健二の脳裏に浮かぶ。今回の事件……始まりはこうして理一と共に車に乗った所からだったのかも知れない。

「……今回の事件……結局なんだったんでしょうね」

アレがピースメーカーであったかどうかも定かではない。可能性は高い、とは思っている。でも、だとしても……考え込んでしまう

健二に、前方を見ながら理一は言う。

「……解析不能。数学的に言うなら七題難問、かな」

「……証明は数世紀彼方……ですか」

窓を開け、風を受ける。

「横田一美は二十年も前に死んでいた。彼女が創り出したAIに彼女の精神が乗り移り、怨念のままに桑田春樹に復讐を始めた。なんて事、どうやったって証明なんか出来ないよ」

「……」

「確かな事はただ一つ」

理一もまた窓を開けて風を受ける。今日もまた暑い一日になりそうだ。

「この騒動の中で桑田春樹は死に、結局は横田一美の復讐は果たされた。コレだけは、誰に妨げられる事も無く、ね」

確かに結果はそうなのかも知れない。でも健二は

「でも……もしかしたら」

「ん？」

「横田さんは逢いたかっただけなんじゃないでしょうか……ただ。

桑田さんに逢いたかった」

それはただの願望だろうと思う。健二がただ、そうであったらと思うだけで……だが

「……そうかも知れないね……」

理一はソレでも良いと思う。甘さであれ優しさであれ、そう思う者が誰も居ない世界は、どこか寂しい世界なのかも知れない。

真実である必要も、事実である必要も、もう何処にも有りはしな

いのだから。

学校の校門に着き健二が車を降り様とすると、声が掛かる。

「いろいろ済まなかったね。今回は僕がとんでもない事に巻き込んでしまった」

最初は侘助で次は自分だ。健二にとって、陣内の人間は厄災なのかも知れないとも思う。

「いえ、それは」

「だが、出来れば今後も我々に協力して欲しい。コレは僕だけじゃない。我々全員の総意でも有る」

「……………」
「思わず俯く。」

「こんな事の後だ。無理には言わない。でも…………僕は出来れば君には協力して欲しい」

理一の目は真剣だ。自分の理不尽も真っ直ぐに見詰めて、それでもソレを言っている。覚悟を持って。

「…………はあ…………」

息を吐く。大きく。ゆっくり。

「昨日の夜にも思ってたんですよね」

「健二君？」

理一の視線が普通に戻る。

「暗号とかに関わると、ホントにロクな目に遭わないんですよね、僕」

「……………」

「暗号には関わるなつてのが、まあ僕の大原則って言うか…………うん。きつとそうなんです」

「…………そうか」

言つて車のドアを開け降りる健二を止める権利は自分には無い。理一も、それは理解しているところだった。

「でも」

ドアを閉めて、開けたままの窓から健二は笑顔を見せる。

「僕には無理みたいです。そこに僕に出来る事が有るなら、あの人は僕の背中を押したでしょうから」

「健二君」

そうして健二は笑つた。ただ、

「だからソレが問題です」と。

「今度は、もう少し簡単な事件でお願いしますね」

「ま、出来るだけ善処するよ。じゃ、また」

「はい。また」

走り去る車を眺めて、校庭に足を踏み入れる。ようやく、小磯健

二の

二度目の戦争が幕を閉じたのだった。

丁度二時限も終わったのだろう。どこか生徒が多いグラウンドを校舎に向って歩く健二の携帯が鳴る。

「？ 佐久間？」

piと通話を押し

「やあ佐久間。昨日は助か「健二お前今何処だ！」った？ いや、今、理一さんに送って貰って学校に着いたけど？」

それがどうしたんだろう？ と健二。

どうにも焦る佐久間が理解出来ないで居ると

「っっちゃあ〜遅かったか」

「？ 佐久間？ 一体何が」

何があつたのだろうか。

「なあ、健二」

「なにさ？」

「良いニュースと悪いニュース。どっちから聞きたい？」

「は？」

どっちから。という事は結局どっちも聞くのだろう。ならば良い方からだ。健二は好きな物から食べるタイプだ。

「じゃ良い方」

「そか。じゃあ……おめでとう健二君。君はタヌキでもOZの英雄になりましたあ！」

「は？ ………………ってええー！ ななななんぞで？」

リスを諦めてようやくタヌキに慣れてきたと言うのに何故だ！と叫ぶが

「はあ？ 当たり前だろ？ アレだけキングと大立ち回りやらかして。しかも佳主馬君が動かしてた時のケンジは凄かったからな。どつからどう見てもキングの相棒だろ？ もう大騒ぎになってるよ」

「そ、そんな〜」

「ま、仕方ないからまた別のアバター使っただな」

全く人事だと思って。と思わずばやくケンジだったが、ふ、と気が付く。コレで良いニユースと言うのか？ 佐久間は。全然良いニユースでは無い。これでは悪いニユースとは一体。

そんな彼が心の準備も整える暇も無く、彼の親友は言った。

「で、悪いニユースだけどな……」

「ちょ！ 待つて佐久間！ まだ心の準」

「お前と夏希先輩の事がバレた！」

「……………え？」

一瞬、日本語が理解出来ない。

つてそんな場合じゃない。

「なななななななんなんなんなん」

「コツチが聞きたいよ。つつか夏希先輩って天然なのな。流石にたまげたわ」

「そそそそそそそれってどうどうどうい」

落ちて着け健二。

「いや、どうもごうも、普通に言い切ったらしい」

「か！」

そう。篠原夏希はそれはそれはハッキリクッキリ言い切った。

彼女の所有するバイブルに従い『恋人に手作り弁当を作り家庭らしさをアピール』大作戦らしい。当然、弁当箱を二つ所有する夏希に「それ何？」「なんで二つあるの？」などの声が掛かり、「篠原く！ 俺の為にくく！」や「違う！ それは篠原さんが俺の為に！」

などの暴走を横目に彼女は言い切った。

「コレ？ ふふ。コレは健二の！」

「」

「」

「」

「」

「」

「なんで？」

ようやく口を利けた者が聞いてしまった。

「ん？ だって彼氏だし。やっぱり彼女としてはお弁当くらい作ってあげたいじゃない？」

「……………誰が彼氏？」

「？ だから健二」

「どこの健二？」

「？ 小磯健二君」

何かおかしかったのだろうか？ とは夏希。それ以外の人間にとつては、全てがおかしい。

「それって、オタク部の？」

「違う！ 物理部だってば！」

「二年の？」

「？ 他に居ないと思うけど」

「誰の彼氏だって？」

「私」

「そう」

「うん」

「そうなんだ」

「？ そうだよ？」

「ふうん」
「？」

凄まじく、静まり。

「……な……に……！」 と怒号が校舎を揺らしたという。

「って事だ」
「……うそ……」

気づけば健二の周りを遠巻きに殺意を纏った生徒が……うじゃうじゃと

「あの、佐久間。なんか怖い人達が」
「ああ、それはアレだな。KKK団」
「なに？ それ」

そんな部活あったっけ？

「今日発足した。【小磯・健二を・殺すための・団】だそうだ。全男子生徒の四十三%が加入したらしいな」

軽く言い放った佐久間にはもつと聞きたい事があるが、まずは健二は確認せねば成らない。

「そか……ときに佐久間」
「なんだ？」

「佐久間はその団に？」

「……」
「……」

「……じゃ」「piと切れた。」

「さくまー！ー！ー！ー！ー！」

彼とは一度友情について拳で語り合う必要がありそうだ。だが今はそれ所では無い。

「ちょ！ 皆さん、まずは話し合いを」

健二の反応に一瞬止まった軍勢。だったのに、そんな騒ぎを何かと思い二階の窓から顔を出したのはご存知、篠原夏希その人であり、彼女はそれはそれは嬉しそうに、まさに恋する乙女が自らの恋人に向ける華やかな笑顔

「ア！ 健二ー！ー！ー！ー！」

とぶんぶん手を振っている。本当にイイ笑顔だ。

「は……はは…………」

一歩後ずさり、戦略的撤退を敢行！ すぐさま地鳴りを持って押し寄せる軍勢。

「こおおおおいそおおおお！ と、それはもう猛然と。

「あれ？ 健二ー！ー！ー！ー！ どり行くのー！ー！ー！」

「僕にも分かりませー！ー！ー！ーん！」

恋人が更なる拍車を掛けてくれるありがたい状況の中、どうやら小磯健二の三度目の戦争が始まりそうである。

天高く、雲も大きい九月の空の下、小磯健二は必死に駆けて行く
のだった。

終わり

後編（後書き）

これにて終了になります。

拙い駄文にお付き合いいただきありがとうございます。御座いました。

このサイトに初めて投稿するにあたり、緊張しました。（ネットなのにwヘタレです）

DVDからサマーウォーズに入り、漫画を読み、最後に小説に。

小説版が一番好きで、サマーウォーズSSの需要ってあるのかな？
と思いつながら書いてしまいました。

次も何か書かせて貰おうと思っています。

何かのフィンフィクションにするか、オリジナルにするか。今はまだ模索中です。

それでは、機会が御座いましたらまたお相手をして下さい。

ありがとうございます。

ダイちゃん……………（この名前をまず改名した方がいいな。うん><）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7799k/>

SEPTEMBER WARS

2011年10月6日20時02分発行